

八尾歴史物語

二五巻

旧植田家資料からひもとく昔のくらし 上 (書籍編)

安中新田会所跡旧植田家住宅には、これまで紹介した民具のほかにも多くの資料が残されています。そのうち今回は、書籍から垣間見えた植田家の暮らしの一端についてお話しします。

植田家に残されている書籍は、江戸時代中頃から昭和に至るものまで2000点以上に

も及び、^{はんぎ}版木に彫って印刷した

「^{はん}版本」や手書きで複写された「写本」が多く見られます。また、

書籍の種類もさまざまで、^{ししよ}儒教の教書で特に重要とされる四書

^{ごきよう}五経の中の『孟子』や歴史書の『資治通鑑』『十

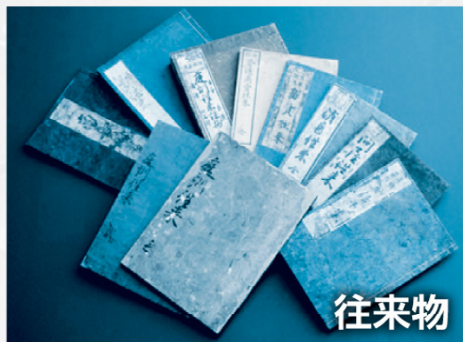
八史略』といった中国の書物や漢詩集、『日本

書紀』や漢字を学ぶ手本となる『千字文』な

ど学習用のもの、幕末から明治初期の出来事をまとめた『見聞雑誌』『維新見聞記』や

紀行文などの読み物、そのほか

生け花の本や能、狂言、^{うたいほん}謡本、



往来物

句集など趣味やたしなみのためのものなどがあります。

中でも『^{ていきんおうらい}庭訓往来』『商売往来』

『百姓往来』などの往来物と呼ば

れる、主に手紙のやりとりの例文から必要なことを学ぶ初級教育用の教科書が目につきます。特に『庭訓往来』は江戸時代、寺子屋などで子どもたちがまず最初に勉強すると

いう書物で、衣食住、職業、経営、建築、司法、職分、仏教、武具、教養、療養など、内容は多岐にわたります。また、女性用の教科書として、^{かいばらえきけん}貝原益軒が作った

とされる『^{おんなだいがくからばこ}女大学宝箱』

も残されています。これらはいずれも角が擦り切れていたり、手垢で汚れていたりと使い込まれた様子が見てとれ、子どもの教育に熱心であったこ

とがうかがえます。もしかすると

当時の植田家は、寺子屋のよう

な役割を担っていたのかもしれない



女大学宝箱